
二度、瞬く

56

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二度、瞬く

【Nコード】

N5218J

【作者名】

56

【あらすじ】

この小説はBL要素の性描写が入りましたので、ガイドラインに従いまして途中からムーンライトノベルの方に再投稿しなおしています。続きが読みたいと思っただけの方はムーンライトの方へお願いします。再投稿後しばらくで、こちらの方は削除させて頂く予定です。ご了承ください。

最後の嘘（前書き）

オリジナルBL小説です。BLが苦手な方・15歳未満の方・義務教育中の方はご遠慮下さい。

最後の嘘

全部で6秒もかかった。

横切るはずの校舎裏。

人がいると気付くのに1秒。

それが抱き合うカップルだと気付くのに2秒。

同じ制服の背中に抱きしめられて、キスに没頭する女子高生。

その顔が一年半付き合っている彼女だと気付くのに3秒。

全部で6秒。

暗い中で一瞬目が合ったと思ったのは錯覚だろうか。

人生を捻じ曲げた6秒間から慌てて眼をそらし、何も見なかったかのようにまた歩き出す。

3

「あれ、貴崎。帰んの?」

昼休みの耳障りな喧騒の中、貴崎が乱暴な手つきで教科書をカバンに詰めていると、後ろの席から声が飛ぶ。

「お前、部活いいのかよ。年明けの大会出るんだろ?」

こちらが無視していることにも気付かず悪びれない表情で貴崎の顔を覗き込んだのは、同じ部活の副主将を務める男だった。

「野木、放つとけよ。そんな奴」

そのさらに後ろから飛ぶ剣呑な言葉に、振り返らなくても声だけで大嫌いな顔が頭に浮かんだ。

「調子乗って無視してる奴、氣遣う必要ねえって」
わざとこちらに聞こえるような大きな声。

陰口は慣れていた。

無愛想。無表情。何考えてるのかわからない。

そんな言葉が聞こえてきたら、まず自分の噂話をしていると思っ
て間違いないと貴崎は思うことにしている。

またか。

相手にするのも面倒で、いつも通り無視を決め込み表情一つ変えず貴崎はカバンを肩から掛けた。

椅子に座ってこちらを見上げるいくつもの視線の中を、正面だけを見つめて通り過ぎる。

「ほんとうぜえわ、貴崎。」

佐藤も何でこんな奴と付き合ってたんだよ。結局あいつも顔だけで、男見る目ねえな。バカでやんの」

いつもなら聞き流せる悪態。日を選ばなかったことだけがお互いの運の悪さだろう。

数分前の映像が圧倒的な解像度でフラッシュバックし始める。

自分ではない男の肩に添えられた白い手。

少し踵を浮かせる細い足首。

貴崎には見せたことがない色っぽい表情。

その全てが自分のものだと思っていた。

たとえば手しか握った事がなくても。

ほんと……。ほんと、面倒くせえ。

標的から一二歩通り過ぎた所で足を止めて、浅く一息ついた。

言い訳するなら、カツとなったから。

本当のところは、いけ好かない相手の言葉に、自分が向き合えない真実を見いだしてしまったから。

無表情のまま振り返り、ごく自然な流れでそいつが座っている机を強く蹴りつけた。

衝撃音。

ニヤけた顔と目が合う間も無く、その身体が椅子と共に吹っ飛ばすこと寸秒。床に転がり落ちたシャーペンの音が響くほどに教室は静まり返った。

「痛つ……！」

その瞬間だけは幾分かスッキリとした。

蹴った相手を見下ろし、現状を把握して怒りを沸き上がらせる男の表情だけを確認してから、また教室のドアへ向かう。

立ち上がり殴りかかろうとしているらしい大きな体を、数人がかりで抑えつけていることが背中越しにわかる。

浴びせられる罵倒と非難めいた視線を追い風に、教室を後にした。

今年最後の厄日であろう今日という日に、正午過ぎの運動場の空はうっとうしいくらいに晴天であった。

乾燥した冷たい空気とそれを貫く一見穏やかな日差しに貴崎は顔をゆがめ、裏門を出て一路自宅へ。重々しく歩き出したはいいのだが、駅に近づくにつれて、人の群れの様子がおかしいことに気付き始めた。

財布片手に昼食を買いに出たOL達が、興奮した様子で小走りに駆けていく。

コンビニ前で煙草を吸うサラリーマンが首を伸ばして道先を覗き込む。

昼休みの繁華街に、得体の知れない緊張と興奮が漂っているのを敏感に感じる。

不思議に思っていると、ビルの向こう側からサイレン音が高らかに響き始めた。

貴崎は一瞬焦った。

何も悪いことをしていないはずなのに、足が止まり気がひける。いや……この時間に制服で歩いているのを見つかるのはまずい。

以前何度か経験した事がある厄介事を思い出して、急いで路地裏に回りこんだ。

平日の昼間、高校の制服と繁華街、これらのキーワードを警察は驚くほど敏感に嗅ぎ付ける。

今日は本格的についていない。

深い溜息を吐き足元を見つめながら、ひと気のない暗い道を歩き始める。

告白された時のことを思い出していた。

思春期に入って以降、人と接することをひどく避けていた貴崎が人に好かれるなどという事は、自分自身でもあるはずがないと思いつ込んでいた。

それなのに夏祭りのあの日。佐藤由美子は堂々と貴崎のことが好きだと言った。

少し内気で人当たりの良いテニス部の癒し系一位が貴崎に告白するとは、貴崎自信よりも周りの方がおおいに驚愕した。入学以来初めての珍事と学年中がどよめいたのだ。

簡単に安定を崩し浮かれ乱れる思春期の心情をひた隠しにして、貴崎はごく冷静を装って告白を受け入れた。断る理由が思いつかなかったし、自分のキャラを守って鼻で笑い除けれるほど強くもなかった。

それから交際が始まったのだ。

絵に描いたように内気でひたむき。貴崎が少し見つめるだけで頬を赤らめて俯く、自分が知っている中で純粹という言葉が一番良く似合う子だと思っていた。

今日までは。

どうせ佐藤も裏で俺のこと笑ってたんだろ……。それも一年半という長い期間。

唯一と言えるほど心を許していた恋人も、クラスの奴等と何一つ変わらない類の人間だったのだと気付き、全てがどうでもよくなつた。

「ねえ、君一人？」

それほど遠くない背後から、不意に若い男の声か、恐らく貴崎を呼び止めた。一瞬びくつきながらも、振り返ることなく、暗い細道を足早に突き進む。

駅裏にある風俗街のせいか、男であるはずの貴崎にも、こういったお誘いの声がまれにかかる。

「ねえ、今暇？」

無視して歩き続け線路をまたぐ地下道を目指すが、その足取りを追って一二歩後ろから軽い靴音がしつこく付いてくる。

「このまま行くと、君警察に補導されちゃうと思うよ？ この先でパトカーがはってるからね」

その言葉に足を止めた。

「あ、やっと止まってくれた」

言って嬉しそうな初対面の顔が、どうしようか悩もうとしていた貴崎の前に背後から回り込んだ。

歳は二十代半ばか三十前。

濃いグレーのスーツに、白のYシャツ、紺のストライプ柄のネクタイ。サラリーマンにしては身のこなしが軽く、手ぶらだ。両手をポケットにつっこみ、何気なく貴崎の全身を眺める。一日を通して殆ど笑わない貴崎にとって、男の爽やかな笑顔が不快以外のなにもでもなかった。

優しそうな顔つきからして悪い人間には見えないが、貴崎の経験上悪い人間が悪く見えたためしはない。

斜め上の不愉快な笑顔ををキツと睨みつけていると、男は少し動じたのか眉を上げて困ったような表情をした。

「警察の話は本当だよ？ 嘘だと思っならこのまま行ってみるといい。さつき自分の目で確かめて来たから間違いないよ。」

少し前に、この先で人殺しがあつたらしくてね」

本日の自分は、いったいどこまでついていないのか。

男から目をそらし、舌打ちをしてどうしたものかと考え込む。

貴崎の戸惑った素振りが予想通りの展開だったのか、男は明るい笑顔を取り戻し、それならと提案を持ちかけた。

「もし良ければ、僕と一緒に来ないかい？ 向こうの道に車を停めてあるんだ。」

制服を着ていても、大人と二人で車に乗っていれば警察もごまかせるだろうか？」

大人。その一言にひどく心が揺れた。

男の提案を受け入れねずとも警察をごまかす方法なんていくらでもあった。

何の下心も無しに男がそんなことを言っているはずが無いということも分かっていた。

でも本当に、この時は全てがどうでもよかったのだ。

どこかで時間を潰すという選択肢を、知らない人間に付いて行くという危険性を、あの6秒間と教室を出る時に浴びた罵声が、貴崎に考えることをやめさせた。

俯いたまま何度目か分からない溜息をつくど、疲れがドツと押し寄せる。

いつもなら絶対に進まない展開も悪くないかと思えてくる。

貴崎は男に向き直り、顔を上げた。

「車って、どこに停めてあんの？」

男の車は、来た道を五分程引き返した細い河川沿いに停められていた。

たいして車に詳しくない貴崎が見ても、恐らく高価なのだろうと思わせる流線型を描くスポーツタイプの白い車体。

ポケットに手をつっ込んだまま、冬日の柔らかい光を鋭利に乱反射するボディを遠目に眺め、やはり男が普通のサラリーマンでは無いと確信する。

今更ながらに付いて来たのは少しまずかったかと貴崎は不安になり始めていた。

「貴崎……！？」

突然名前を呼ばれて振り返る。

立っていたのは同じ制服。見慣れた幼馴染だった。

「成宮……。お前、何してんの？」

不安げな顔をして成宮がこちらに駆け寄ってくる。

「貴崎こそ、どうしたんだよ。急に帰ったっていつから、俺……」

余程走り回って貴崎を探していたのか、バスケット部のくせに成宮は息があがっている。

また面倒な奴につかまってしまった。

幼馴染といっても、同じクラスで一緒に登校するだけの仲。そう貴崎は思っていたが、成宮の方は一方的に貴崎の心配をして世話を焼きたがる時が少なからずある。

それが貴崎には迷惑でたまらない。

誰にでも分け隔てなく明るく接し、容姿実力共に非の打ち所がない色男が、貴崎なんかの世話を焼けば焼くほど、逆にこちらの非が目立って風当たりが悪くなる。いつになったらこいつはその事に気が付くのか。

クラスで唯一、成宮をうつつとうしく思っている人間が貴崎に他ならない。その理由がどうしようもなく自己中心的で、それがまた嫌われる理由だということは自覚していた。

今日も学校を抜けて、まさかこんな所までわざわざ探しに来るなんて。完全にどうかしていると貴崎は吐き気を覚える。

「なんでお前が探しにくんの？ 訳わかんねえ……」

貴崎が嫌そうに言うと、伏せ目がちに言いにくそうな言葉を成宮がつぶやく。

「あの……何か、あったのか……？ その……、佐藤と、とか……」

そこはやはり幼馴染なのか、ずばり一番聞かれたくない所を成宮は言い当てた。

「はあ？ お前に関係あんのかよ」

出来る限りの悪意を込めて吐き返す。が、言い放った相手はこちらを見てはいなかった。

貴崎の僅か後方。さっき出会ったばかりの男の方を鋭い眼光で射

抜いている。

「貴崎。誰だよ……、こいつ」
いつになく低く凄みのある成宮の声に貴崎は内心慌てた。

「こ、この人は……」

「僕は貴崎君のお父さんの古い知り合いでね。さっき偶然出会って、
久しぶりに今から食事でもと思ってるんだ」

口ごもる貴崎の後ろから男がすらすらとした口調で嘘を吐くと、
それを成宮はさも不審そうに目を細めて睨みつける。

「本当、なのか？」

成宮が心配そうに眉を寄せてこちらに向き直ると、後ろめたい貴
崎の瞳が小魚の動きで泳ぐ。

「あ、ああ。……まあ、な……」
動揺著しい落ち着かない返事。

嘘は嫌いだ。

人と喋らなくなったのも最初はそれが理由だった気がする。

嘘を吐いて吐かれるくらいなら、喋らなくていい。仲良くなんて
ならなくていい。

友達なんていらさない。

「部活はいいの？ 野木が心配してた。年明けの大会どうするん
だって……」

急に感情の薄れた話し方になったと思ったら、成宮はどういう訳
か携帯を取り出し操作し始めた。

「午後の授業だって、出席日数ぎりぎりだろ？」

そう言っている間にも指を忙しく動かして携帯に何かを打ち込んでいる。

やっと顔を上げて携帯を触る指を止めたと思ったら、次はその携帯を貴崎に押し付けてくる。

「な、なんだよ……」

「これ、今朝撮った写メ。昨日貴崎が言ってた課題、やっぱり掲示板に張り出されてたよ」

昨日　？　課題　？

成宮が何のことを言っているのかさっぱり理解出来ないまま渡された携帯を覗き込むと、プライバシーシールの向こう側に映っているのは写メではない。

メール文　？

『知り合いつて話、嘘だろ？　そいつから逃げたいって顔に描いてある。』

断りづらいなら俺が上手く言っつて連れ出すから。

嘘なら　二度瞬きして』

戸惑った。

成宮には貴崎が男から逃げたくて、助けを求めているように見えるらしい。

それが嘘ではないから余計に戸惑うのだ。

やや振り返って斜め後ろの男の顔を見上げると、やんわりと微笑を浮かべたまま驚くほど冷たい、威圧的な視線で貴崎を見下ろしていた。

二度瞬くだけで、成宮は貴崎をこの男から逃がしてくれるという。

次の瞬きの回数で、この日後半のレールの向きが変わる。
分岐点に立ったところで、悪いことにまた6秒間のフラッシュバ
ックが貴崎を襲った。

ひかえめな角度で浮いた踵。

白い指先。

初めて見る表情。

『ほんとうぜえわ、貴崎。佐藤も何でこんな奴と付き合ってたよ』
なんなんだよ……。結局、……結局みんな、一緒なんだろ？
お前だって、裏で俺のこと、そうやって笑ってたんだろ？

一度瞬く。

そして貴崎は正面の顔をきつく睨んだ。

「悪いけど成宮。俺、本当にこの人と知り合いで、今から昼飯食い
に行くから」

冷たく言って携帯を突き返す。成宮の瞳が揺れる。

「でも……、貴崎」

思い余った様子で貴崎の左手をつかむ成宮のついさっきまで発汗
していたらしい熱い掌が、低体温の貴崎にはひどく怖く感じられた。
びくりと細い身体を跳ねさせ、熱すぎるその手を邪険に振りほど
く。

「お前さあ。何でいつも俺の保護者気取りなわけ？」

そついつとこがうざくて昔から嫌いなんだよ！ 頼むから、俺の事は放つといってくれ」

こんな嘘らしい嘘をついたのは何年ぶりだろうか。

成宮を鬱陶しく思うことはあっても、嫌いとはまでは思ったことがない。

本当はこの場から逃げたくて仕方ない。

言った瞬間、後悔するだろうとは思ったが、成宮の悲しそうな表情を見てすぐにそれが現実となった。

「行こうか」

男が満足げな笑顔で言い、キーを向けて車のドアロックを解除する。

貴崎は押し黙ったまま肩に回った男の手にゆるく引かれて、成宮に背を向けた。

最後の嘘と、立ち尽くす幼馴染を置き去りにして、名前も知らない高級車が大きく方向転換を強いられたレールの上を進み出す。

最後の嘘（後書き）

【後書】

お久しぶりでございます> (| |) <
皆様いかがお過ごしでしょうか？もう随分経ってしまいましたね (- o - ; ;

正月休みを取った分の仕事の跳ね返りがひどく、今日明日と久しぶりにゆっくりできる二連休。やっと更新することが出来ました (;
- | -) = 3 フウ

ほんと、歳を重ねるってなかなかハイリスクです。全然仕事の疲れが取れなくて、息子を寝かしつけて自分が先に眠ってしまう毎日 (q) z z z ジュルリン 新年早々、三日に一度パソコンを開けるか開けないかの日々で心が折れそうになっておりました (。
' () ウワアアアン！

一応始めてみました新連載『二度瞬く』ですが、こちらは不定期更新（その分一話の文字数が増えます…… (- | - ;) () になります。久しぶりの連載なのでリハビリ作品になりますですがご容赦下さいますえ m (| | ” m)
間隔が空く分読み返す回数は増えたので誤字脱字は減っている……
…といいよね (' () ノホントニネエ！
実はストーリーが完全には練りあがっていないのですが（不安だ…… ()、まあ一話の内容が動くことは無いだろうと書き上げてみました。

前作のような関西弁のお話を期待して下さい下さった方、申し訳ありません> (| |) <
今回の内容からやっと本題に入る予定です。

そして改めまして、前作の完結後コメントを頂きました、向井みや様、珂咲柏夜様、松原未佳様、(コメを頂いた順)、また未公開などで拍手コメを下さいました方々、本当にありがとうございます>(一一)< 読者様数以外で反応が返ってくるのが少ないこのサイトで、絶大なやる気を頂きました。新連載を始めるあたつてももちろん時間を割いて読んでくださっているだけでも、読者様数でやる気を頂いております どうか皆様、今年も御ひいきに ミ

それでは、もうすぐ旦那が起きてくる時間ですので入れ替わりにお休みさせて頂きます。

なにか楽しくて休日の朝早くから同僚とモンハンに明け暮れるのか……あの野郎。まあ人のことは言えませんか、(´、´)／へへっでは。

GOODNIGHT (; ;)ノ 。。。。。

待ち人來ず（前書き）

「注：残酷な描写・内容が含まれますので苦手な方はご遠慮下さい」

待ち人來ず

「よかつたの？ 置いてきちやって。成宮君だっけ……ずいぶん君のことを心配していたみたいだ」

少しも心配などしていない軽い面持ちで言い、遠く海沿いの道先を眺めながら、男は慣れた手付きでギアを上げる。

「ああ……別に」

気のない返事をかえしながら貴崎は車外の景色を眺めた。

最初は落ち着かなかつたスポーツカー特有の重低音と、うわついた動きのメーター類の指針が、今では自分の部屋の一部のように思えるほど居心地がよかつた。それくらいに長い時間、この車は貴崎を閉じたためたままにしている。

いかにも純正品ではなさそうな助手席の赤いシートが背中になじんできているのを感じながら、少し前に暴言を吐きかけた幼馴染の悲しそうな瞳を思い出していた。

数時間前。男が言った通り、大人と車に乗っているというだけで制服少年一人では到底太刀打ちできない警察の検問を、貴崎はたやすく突破した。

体調が悪い生徒を今から病院に連れて行くという、取ってつけたような嘘を警察は疑いもせず、男の運転免許証をスルーした警察官の目は、運転席の窓から貴崎を哀れみの目線で覗き込むだけであつた。

それから近くのイタリアンレストランで男と昼食を食べた後、当然解放される訳も無く、買い物、ドライブと男に連れ回された。逃げる機会はいくらでもあったが、それさえも今の貴崎にとっては何面倒だった。

幸い男はとても紳士的で、貴崎が殆どしゃべらずにいても機嫌を悪くすることはなく、ただ一二歩遅れて隣について歩くだけで満足そうに微笑んだ。

気が付けば車窓からの眺めはすっかり闇に包まれている。

最後に車を降りたのは、老舗料亭の静かな駐車場ではなかったか。

なげやりな気分にかかせて、飲めもしないのに手を付けた食前酒というやつが、かなりの効力を発揮しているらしい。

身体がふわふわと軽く、実に気分がよかった。

初めて体験する心地よさと、全てを忘れられそうな開放感。貴崎は今日という最悪な日の終わりに自分が求めていたものはこれだったのだと、少し角度を寝かせたシートに顔をすり寄せた。

「大丈夫？」

男の静かな声に薄目を開けた。

絶え間なく唸りをあげていた車体がいつの間にか停止している。

倒していたシートを起こし見ると、フロントガラスの向こう、ガードレール越しに広域の夜景が瞬いていた。

少し振り返ると、リアウィンドウの濃いスモークガラスとの境界を持たない透過性の低い一面の闇。

どうやら、ずいぶんとひと気のない山奥からこの風景を眺めているらしい。

「穴場なんだ」と微笑む男は、日の高いうちとは比べものにならない近い距離から、長い人差し指で貴崎の伸びた前髪に触れた。

それに反応するように、ちりりと後頭部がしびれ、新しいステージの幕開けを貴崎は痛感する。

「キスくらい、いいだろ？ その歳で初めてってことは無いはずだ」

エンジンが停まってからどれくらい経ったのだろう。貴崎の耳に口元を寄せて男が静かに言った。

その優しいはずの響きが、何故だかひどく挑発的に聞こえたのだ。

キス、くらい。

初めてでは無い、はずだ。

もちろん。キスくらい、初めてでは無い。

貴崎は取り急ぎ思い出す。

確かあれは小学校低学年の時。何かのご褒美だとか言って、従兄弟に褒められてキスをされた。いや、あれは従兄弟じゃなくてバカ兄貴だったか……。とにかく、あの時は間違いなく唇だった。

それに記憶には無いが、幼少期にはいくらかでも両親にキスされているはずだ。

そつだ。

キスくらい。どうってことはない。

何しろ初めてではないのだからと、狼狽しかけた神経に言い聞かせて立て直す。

今日の正午、自分の彼女もそう思ったのだろうか、嫌な回路へ思考が流れ込む。

どうして。どうして、その相手が俺じゃダメなんだよ……。

あれから何度も、数え切れなくらいに助手席で繰り返してきた無限ループのスイッチがまた入りかける。それは毎回6秒間の悪夢から始まる。

嫌だ。

もう思い出したくない。

頼むから許してほしい。逃れたい。あの6秒間から。

どうでもいいのではなく、ただ全てに疲れたのだと貴崎は気付き、悪夢に取り付かれた全身から力を抜いて瞼を閉じる。

それを返事と受け取ったのか、早々に触れてきた男の唇は驚くほど冷たかった。

びくりと肩から上を硬直させて頭を後ろに引くが、座席のヘッドレストに阻まれる。それを追うように男の唇がさらに押し当てられて、貴崎の儂い体温を奪っていく。

閉じていた瞼をわずかに開く。細められて刺すような視線に気がつき、またぎゅっと閉じる。

しばらくして男の顔が離れていくと無意識に息が弾んだ。呼吸という大切な生命維持活動を忘れていた。

「ごめん。もしかして、キス、初めてだった？」

男が笑う。頬に血が駆け巡るのを隠すように下を向いて、不貞腐れた面持ちで真横を睨むと、男はまた面白そうにははと笑う。

「本当に可愛いね、君」

そう言って、また唇を寄せる。

知らぬ間に貴崎の吐く息が白くなるほど車内は冷えきり、凍てつくような体温の男同様、新たな熱を求め始めている。

さつきよりも粘り気のあるキス。

またきつく瞳を閉じると、あろうことか、ひんやりとした男の舌が感触を楽しむように貴崎の下唇を這って熱を吸い取っていく。

何してんだ。俺は……。

恋人の浮気現場に動揺して、どうにでもなれと行動した結果が今の惨状だった。

ずっと前から思い描いていた理想のキスとは全く違う。恋人はおるか、異性ですらなく、年上の男と唇をつなげている。

男に声をかけられた時、これくらいの展開は貴崎にだって予想できていた。それだけに、推測通りの現状をいざ向かえ、内心慌てふためいているいる自分が馬鹿みたいで、情けなくて、くだらない人間に思えた。

男の指が貴崎の首筋を滑る。

金属のように冷たい指先だった。

それに驚き開いた唇のわずかな隙間に、飢えたような動きで男の舌が侵入した。

「……っ！」

これ以上は無理だと速やかに判断し、舌から逃れようと激しく首を振る。両手で男の肩を押し返してみるが全く動じない。

途端、座っていた背もたれが勢いよく倒れて上から男が覆いかぶさり、すごい力で貴崎の全身を押さえつけた。

やばい……！

全身をいやらしい動きで這い回る手を払いのけ、両足を力任せにバタつかせると、そのかいあってか男の上半身がいったん離れた。

「大人しくしてくれないか。無理やり犯すのは趣味じゃない」

窮屈な暗い車内で貴崎の上に馬乗りになって見下し話す男の顔が、出会った時とは違って見えた。

車内の空気と同じように冷気を含み、生命の温もりを感じさせない表情。

「誰が、お前なん、か……と」

腹の上に乗られているせいで上手く声が出せない。罵声を浴びせるかわりに最大限の軽蔑をこめて睨み上げると、男は目を細めて少し考え、ニヤリと笑った。

「ならこうしよう。」

暴れられるとゆっくり楽しめないからね。一日に一人でも二人でも同じことだ」

言葉の意味を理解する前に、男の両手が貴崎の細い首に回った。

「犯すか、やるか、どちらが先でも俺はいいんだ。」

君がそのつもりなら、先に静かになってもらおう。

俺の相手をしてくれるのは、あとでいい。死んだあとでね」

死んだ、あと……？

それって、俺が　？

俺。

もしかして……殺され、る……？

殺す。この言葉が今日二度目だと気付き、記憶をたどってハツとした。

会ってすぐに男は言った。

『少し前に人殺しがあったらしくてね』

そうか。そういうことだったんだ　。

男が貴崎を車に乗せて検問を抜けたのは、貴崎を助けるためなんかじゃない。

男自身が検問を通過するため。

こいつが。こいつが、人殺しの犯人なんだ　。

貴崎の首にあてがわれた男の両手にぐっと力がこもる。

それを掻きむしって離そうとするが、長い男の指は細い貴崎の首に余裕をもって一周し、その上かたく吸い付いて剥がれない。

嘘。

嘘だ　。

完全なる想定外だった。

今考えれば、逆にどうして気付かなかったのかが分からないくらい、簡単に思いつく可能性なのに。

あの6秒間の呪縛せいだ。

「……いや……。嫌だッ……。死……。く、な、いつ……。！」

圧迫された気道から涙声を絞り出すと、男は少し手を緩めて鼻で笑った。

「悪いのは君だよ？　いくらでも逃げるチャンスはあげたはずだ。

成宮君といったか、あの子だって君を助けようとしてくれたんだろ？　君はその助けを蹴って、ここにいるんじゃないのか？　この選択肢を選んだのは君だ。

ナンパされて、何も考えずに殺人犯について来てしまった。同情の余地はないと思うけどなあ」

喉を押さえ付ける手が多少ゆるまり、少しなら声が出そうなのに、あまりにも的確な男の台詞に貴崎は言葉を失った。

一寸先の死の恐怖に、男の手を引き剥がそうとする指先から力が抜ける。

唇が小刻みに震える。

涙でべちよべちよになった顔を何度も左右に振り、死にたくない
と男を見上げる。

また男は笑う。

「君は本当に可愛い。

誰でもよかったのに……。まさか君のような子に、それも手付かず

の綺麗なまま出会えるなんて。

奇跡だ」

奇跡。その奇跡のせいで、俺は、死ぬのか。

男が上半身を乗り出し、両腕に体重をかける。

息ができない。

苦しい。

目尻から伝っていた熱い流れが途切れる。

「怖がらなくてもいい。

死んでも、君を一人にはしない。俺の近くに置いてあげよう。

身体は、温かいうちに抱かさせてもらうよ」

苦しい。苦しい。苦しい。

息を吐くことも吸うこともできずに、ただ乾いた熱だけが開いた口から吸い上げられていく。

頭がぼんやりとして、涙で水中のようになった視界がさらにかすむ。

ああ、俺は死ぬんだ。

こんなことなら、もっと　もっとやりたい事をやっておくのだった。

どうして昨日アイス買うの我慢したんだ。

どうして録画した番組見とかなかったんだ。

どうして、恋人にキスしとかなかったんだ。

最後の瞬間に思いつくのは、貴崎の人生を表すかのようにくだらない事ばかりだった。

噂に聞く走馬灯とやらは、あまりにも生きた期間が短すぎたせい

か全く上映される気配がない。

俺の部屋、警察が入ったりすんのかな　　もっと掃除しとくんだった。

あ、兄貴にジャンプ返してない　　もうワンピースの続きも読めないのか。

親父に一言でも、ありがとうって言うっておけばよかった。
恋人に、一度は目を見て好きだと言えばよかった。

そつだ……。そつだ、あいつにもまだ。

顔面が火照って焦げるように熱く、首で塞き止められた高熱の血液が頭に溜まっていくのがわかる。

「……ッ、とお……ま……」

「じきッ。」

男の親指が貴崎の首に深く食い込んだ瞬間、何かが折れるような鈍い音が体内で響いた。

テレビの電源が切れたように視界が暗黒に染まり、ずっと耳鳴りのように顔の内側で響いていた血流のざーざーという音が止む。

首から下の感覚は無くなり、男の腕に掛かっていた貴崎の手が、糸が切れる操り人形の動きで座席に落ちた。

苦しい。苦しい。苦しい。

息を止めていた水中から勢いよく顔を上げるように、酸欠状態の肺にひと息目を吸い込んだ。

無明の間が一転、眩しいくらいに明るくなったので貴崎は顔をしかめる。

白一色。

薄目で自分が立ち尽くす場所を確認すると、そこは白い霧に包まれている、ぼやけた世界だった。

天国 ？

思ったのも束の間、そうではないことが分かった。

なにやら騒がしいと思っていたら、首輪をした小型犬が貴崎の足元で威嚇丸出しで吠え騒いでいる。すぐさま「コラ」と声がかかり、引きずられるようにして犬は遠ざかって行った。

気付かなかったが、貴崎のすぐそばに犬の飼い主らしい初老の女が立っていたのだ。

未だ酸素不足の余韻を引きずった脳ミソで、貴崎は犬と飼い主が去るのを啞然と立ち尽くしたまま見送った。

そのあと立っている場所をもう一度確認すると、貴崎が動悸激しく突っ立っていたのは、まぎれもないアスファルトの上だった。

周りの景色をざっと再確認した後、まさかと思い振り返ってみると、思ったとおり。見慣れた鳥居が背後にそびえ立っていた。鳥居が囲む四角の中からは、あの世へ続くかと思えるほど天高く立ち上る石階段が続いている。

そこは、毎朝登校時間に幼馴染と待ち合わせる、いつもの場所だ

った。

天国の靄だと思っていたのは、この季節によくある朝霧だ。よく目を凝らしてみれば珍しくもない、見飽きた風景が広がっている。ぼやけていたのは周りではなく、貴崎の脳ミソの方だったらしい。

いつもの時間にいつもの場所。いつもの朝だ。

「夢、か……」

思わず声に出してしまうほど、鮮明な夢だった。

息荒く立ち尽くして独り言をつぶやく高校生を、母親に手を引かれて通り過ぎようとしていた園児が不思議そうに見上げる。

その小さな視線から気まずく目をそらし、白い息を吐き出してから階段の二段目に腰を下ろした。

朝露を含んだ土の匂いがする。

首に巻いた気休め程度のマフラーを後ろできつく結びなおし、冷え切った身体を丸める。

寒いのにシャツの中の背筋はぐっしよりと濡れていた。

それにしてもこんな場所で眠ったあげく夢まで見るとはどうかしている。

必死にその理由を思い出すと、どうやら昨日貴崎が半分酔っ払って家に帰って来たのは夢ではない。

どこまでが夢だ。

あの最悪な6秒間。その後学校を出て男に出会い、それから確か、貴崎を探して駆けてきた成宮を振り切って男の車に乗った。

警察の検問を抜けてイタリアンを食べた後、買い物に付き合わされて、ずいぶんと遅くまでドライブした。最後はこの場所まで車で送ってもらったような。

行き交う人々を目で追いながら昨日最後の記憶を引き出そうとしていると、向こうからいつもの顔が冴えない表情で歩いてきた。

そもそもあいつが待ち合わせ時間に遅れるから、俺が居眠りして変な夢を見るんだ。

朝一番の悪い出来事を幼馴染に責任転嫁して、貴崎は立ち上がる。

成宮は、じつと足元を見詰めながらこちらへ歩いてきた。

鳥居に差し掛かる手前で一度足を止めて顔を上げたが、貴崎と目を合わせることを避け、わざとらしく深い溜息をついてから、また足元に視線を落とす。

あ、……怒ってんな。

やはり昨日貴崎が成宮に吐いた暴言は夢では無かったのだ。温厚な幼馴染が怒ることはあまりないが、それでも昨日は言いすぎた。無視されても仕方がない。

確か、うざいだの嫌いだのと、いつも自分が言われて忘れるのに一苦労する言葉を一通り並べた。

夢の中でも貴崎はずっとその事を後悔していたように思う。

そのせいか思い出したくもないあの夢で、貴崎は最後に幼馴染を下の名前で呼んでいた。

「成宮。あの、さ……昨日は」

話しかけるのを無視して成宮は貴崎の前を通り過ぎる。

「おい！ 成宮」

少し強く呼ぶと成宮は足をいったん止めた。が、ポケットから携

帯を取り出して画面を覗き込む。

貴崎の呼びかけを断固拒否する姿勢だ。

なんだよ、無視かよ。

また投げやりな気持ちになる。

もうどうでもいいと、昨日の反省を活かしきれないまま、貴崎は成宮の後ろについて歩き始めた。

「お、成宮。おはよ」

「おはよう」

教室に入ると数人の生徒が成宮に声をかける。机を囲んでしゃべっていた女子グループがいつせいに振り返り、おはようと手を振る。成宮はそれにいちいち笑顔で答えている。

その軽い挨拶の数々が、決して貴崎にかかることは無い。それどころか誰も貴崎を見てはいない。

全てがいつも通りだった。

「成宮君、おはよう。今日は寒いね」

机にカバンを置くやいなや、待ち構えていたように小柄な男子が一人、成宮に駆け寄って来た。

「ああ、一之瀬。おはよう。本当に、今日は寒いね」

成宮が言くと、少年は何故か伏せ目がちに頬を染める。

一之瀬はいつも大人しく一人でいることが多いが、成宮にだけは

ちよこまかとよく付きまとう。

冬の朝は寒いと言う当然の会話を朝一番から交わして何が楽しいのか。バカじゃないかと貴崎は思う。

それに、どうでもいいとはいえ、さっきまで貴崎を無視しておきながら他の生徒にはにこやかに対応する成宮に、幾分か腹が立った。

「あ……」

楽しそうに会話する二人を貴崎が数歩後ろから軽く睨みつけていると、一之瀬がその視線に気付いてハツとする。

貴崎の存在におびえたように一瞬うるたえた表情を見せ、また一之瀬は目を伏せた。

「あ、ねえ……あの……」

話しづらそうに一之瀬が瞳を泳がせると、成宮が優しく「なに？」と問う。

「あの、今日は……貴崎君、一緒じゃない、の……？」

「ああ。待ち合わせ場所にいなかったから、一人で来たんだ」

一人、で　？

「携帯にかけたけど、出ないし。」

昨日あんな風に帰ったから、またしばらく学校には来ないかもしれないな。

まあ、いつものことだよ。そのうち、ふらっと出て来るさ」

何言っただよ。

俺はここにいるだろ。ここに、ちゃんとお前の後ろに、いるだろ？

徹底的に貴崎のことを無視する、たちの悪いいたずらかと疑ったが、一之瀬の様子が尋常ではないことに気が付いた。血の気が引いた真つ青な顔で、思いつめたように床を睨んでいる。

「なあ、成宮……？」

貴崎は弱々しく呼んでみるが、成宮はやはり振り向かない。怖くなって成宮の肩に手で触れる。

成宮が振り向いた、と思った時だった。

にゅくり。

貴崎の指が、吸い込まれるように成宮の肩の内にあらぬ角度で食い込んだのだ。

「いッ……！」

あるようでない指先の生暖かい感触に驚いて身体ごと後ろへ引く。一二歩さがって、貴崎は絶句した。

今、確実に貴崎の指先は成宮の体内を通り抜けた。

まるで生ぬるいゼリーを指で切るような、とてつもなく気持ちが悪いくらいしか表現できない奇妙な感触。

「成宮君。一時間目、実習室だから早く移動しないと……！」

振り返り、不思議そうな顔で背後を見回していた成宮の腕をつかみ、一之瀬が切実な声音で訴えかける。

貴崎は気が付いてしまった。

成宮の視線が自分の身体を透過して、もっと後ろ、はるか遠くを

見つめていたことに。

まさか。

成宮には貴崎が見えていない。

そしておそらく、一之瀬には貴崎が見えている。それは視覚ではなく、もっと不確かな第六感ともいえる感覚で。

そうか。

俺は、やっぱり。

やっぱり、あの時。

一之瀬は、腕を引いて成宮を貴崎の前から連れ去って行った。最後にちらりと振り返って貴崎に向けた童顔は、とても気の毒そうに眉をひそめていた。

教室を見渡す。

誰にも、誰にも貴崎は見えていない。

いつも通りだと思っていた全てが、今ここにはもう無い。

クラス全員が教室から出て行っても、貴崎は一人で机の前に突っ立っていた。

どうして、アイス食つとかなかったんだ。

どうして、部屋の掃除しとかなかったんだ。

何度繰り返しても、後悔するのは悲しいほどくだらない事ばかりだった。

あの時、ありがとって言えばよかった。

あの時、ごめんとさえればよかった。

あの時、二度瞬けばよかった。

こんなに。こんなに早く、死ぬのなら。

教室の天井角に設置されているテレビの黒い画面だけが、貴崎さえいない、無人の教室を映してこちらを見つめている。

とく予告時期から遅れて読者様を裏切ってしまったしますので、どうか
期待せずにお待ち下さいませ (´・`・´)
ではでは ミ

命日明け

「いいからさつさと乗んなさいよ！ 死んだからってゆっくり休め
ると思つたら大間違いなんだから」

実にヒステリックな罵声。

その女の第一印象は最悪だった。

紺のパンツスーツに胸まで伸ばしたストレートの黒髪。目鼻立ち
のはつきりとした顔にひどく濃い化粧をしているのに、なぜか色素
の少ない、死人のように地味な印象を与える。

貴崎が誰もいない教室を出たのは一時間目終了のチャイムが鳴る
直前だった。

自分の机につつぷし、短い過去をとりとめもなく思い出しては、
これから先という未来がない自分を実感することも出来ず、涙をこ
ぼすこともなかった。

ただ冷静に自分は死んだのだと心の中で繰り返す。

チャイムと同時に教室からあふれ出す生徒の間を、とぼとぼと歩
いてトイレへ向かった。

洗面所の前に立つと、確かに自分は存在しているはずなのに、そ
れを否定するかのように鏡に自分の姿は映らない。

やっぱり。

蛇口をひねる事は出来ても、そこから流れ出る水にはさわれない。ふれても水が跳ねない。感触がない。

やはり貴崎の身体は透けているのだ。

自分の細い指を貫いてまっすぐ排水溝に落ちていく流れを見つめながら、またしばらく立ち尽くす。

校内をさまよう様に歩いていると、一之瀬のように貴崎の存在に気付く者が数人いることを発見した。

その場の空気に違和感を感じ寒気に腕を抱くだけの者、一之瀬と同じように貴崎と目が合い露骨に顔面を青くする者、気が付いているのに絶対に視線を合わせようとせず背を向ける者。

この世の者では無い存在を感じてしまう自分達の厄介な体質を悔やむように、全員が嫌そうな表情をする。

嫌われることには慣れていた。例えそれは死んだ後でも変わらない。い。

校門を出たのは、寒空に濁った太陽がせり上がる正午前。

死んでいるはずなのに外気は冷たく感じ、ぎゅっと身体を縮める。何を考える訳でもなく、とりあえず家の方向につま先を向けて歩き出すと、背後から聞き覚えのある排気音が響いた。

高音を含む重低音。

トロンボーンやホルンを力いっぱい吹いたような音だと思ったのを覚えている。

貴崎が足を止めて恐る恐る振り返ると、校庭前の一本道を驚異的なスピードで走ってくる車がある。

目を凝らしてハツとした。

純白の低い車高。

忘れもしない。あのスポーツカー。

時折浅い爆発音を排気しながら、自分の殺害現場が向こうから急

加速してくる。

立ち震える貴崎の真正面で車体はアスファルトを焦がして急停車し、ドアが開く。

中から顔を覗かせたのは あの男では無かった。
初対面の女。
それもかなりの美人である。

女は見えないはずの貴崎の目をしっかりと睨みつけて、ひるむこともない。

しかしその女はあきらかに不機嫌で、運転席から上半身をこちらに伸ばして急かすように怒鳴りつけた。

「あんた貴崎 祐^{ゆう}ね？ 乗って！」

状況が理解出来ずに押し黙る貴崎に、女は続けて強い言葉で「早く！」と乗車を促す。

「いいからさっさと乗んなさいよ！ 死んだからってゆっくり休め
ると思つたら大間違いなんだから」

啞然として動かないでいると、最後には車内からにゅっと女の白い手が伸びて来て、貴崎の腕をつかんで無理やりに車内に引き込んだ。

命日明け（後書き）

皆様いかがお過ごしでしょうか？

もう前の更新から一月以上経ってしまったのですね（ノ・・・）
ウウ・・・

大変お待たせいたしましたと共に、今回はこんなに短い本文で申し訳ありません。

言い訳をさせて頂きますと、週に一回休み前日に徹夜でパソコンに向かって執筆するという生活だったのですが、前話掲載後から息子の風邪やなんやらで生活が狂いだし、結局この話を書き出したのが三月に入ってからになってしまいました。いやあ、現実逃避出来ない日々……辛かったです（Ｔ＾Ｔ）

このままではまずいと思い、平日の朝に一時間から二時間早く起きて執筆する生活に変えたわけです。するとなかなか調子がいいｗ
（　；）wおおっ！

そして一話分書いてみると、一万字……またしてもK点越え。あかん！と思って割れる所で分割してみると、三つに割れまして、一話がこんなに短くなりました。申し訳ない……（TOT）ゞ スンマセン

そういう訳で第四話をすぐに更新させて頂きます。

七日間のはじまり（前書き）

【お知らせ】ガイドラインにしたがいまして、このお話は性描写に突入し次第、R18の連載として一から投稿し直す予定です。詳しくは活動報告をご覧ください。

七日間のはじまり

「だからあ。まずその呼び方をやめなさいよ！ 縁起でもない」

唇にくわえていた高速道路の領収書を、がさつな手付きでサンシエードの裏に差し込みながら女が怒鳴る。

こちらは既に死んでいるのに、縁起もなにもあつたものではないと貴崎は思う。

「だって……俺が死んだから、わざわざ迎えに来たってことだろ？」

「そうよ」

「んで、俺を成仏させるんだろ？」

「成仏って そんな迷信じみた曖昧なものじゃないって、さつきから言ってるでしょうが。」

要するに、死んだあんたが次の段階へ行くために行う手続き上の書類審査を円滑にするために、必要な情報と証拠物品を もういいわ。どうせ説明しても分かんないんでしょうね。

成仏とかあの世とか……滑稽だけど、まあ昨日まで生きてた奴には、それくらいいしか表現する言葉はないかもね。あんたが思いたいように思いな。

とにかく私は、あんたの死を確実なものにする手伝いをしにきたってわけ」

「じゃあ……やっぱ、死神じゃん」

貴崎が小さくつぶやくと、女がまたキツと横から睨みつける。

「そういうのはねえ、黒い服着て鎌振り上げて、いかにも人の死を

どうとも思ってたませんって涼しい顔した、性格の悪そうな奴に言いなさいよ」

高速を出て最初の交差点でハンドルを右に切りながら、女は早口にいう。

黒い服着て鎌振り上げて、いかにも人の死をどうとも思わないような涼しい顔をした、性格が悪そうな奴　後半全てが、まさにこの女そのものだと言いたい。

何しろこの女は、初対面の貴崎に向かって「よくもこの年末の忙しい時に、変な死に方してくれたわね」と散々怒鳴りつけたのだ。

そして、本当に自分は死んだのかと貴崎が問うと　。

「そりゃそうでしょう。首の骨が折れるほど喉を絞められて、生きている人間がいるかしら？」

そう吐き捨てた。

更に、ダッシュボードに置いてあった、というより放り投げたあつた、一度小さく丸められたであろう皺だらけの薄い書類の束をおもむろにつかみとり、赤信号を利用して荒々しくページをめくって文面を読み上げた。

「貴崎 祐。 16歳。 昨日夜遅く、殺害者の所有する車両内で

」

語尾が消えてからしばらく、貴崎の死因が記されているらしい数行に目を通す素振りをしていた女は、不意に鼻で笑う。

「二度瞬くだけで死なずにすんだものを……本当にバカな子。そんなことだから彼女に浮気されんのよ」

嘲笑うようにいって顔を上げ、信号が変わったことを確認してか

らダッシュボードに書類を元通りに放り投げて、その手でギアを上げた。

かれこれ二時間以上も前の話だ。

結論から言えば、この女は、死んだ貴崎を迎えにきた死神である。貴崎はそう理解した。

女がどれだけ死神という表現は間違っているかと力説しても、どれだけ暗い死神のイメージとは違っていても、自分の現状と女の目的を考えれば、そうとしか言いようがない。

「どこにこんな、FD乗ってデイオールのスーツ着た綺麗な死神がいんのよお。

安い給料でこき使われて、疲れて帰ってきて酒飲みながら韓流映画見て泣いて……。一昨日なんてクーポン使って足ツボマッサージに行ったんだから。

高校生のあんなになんか分かんないでしょうねえ。人が社会に出て、雇われて働くってことの大変さが」

女は正面を見たまま首を横に振る。

もう死んでしまった貴崎に、今更そんな事を言われても困る。

「こんなに一生懸命働く健気な美人をつかまえて、死神だなんて…。

あんななんて、もう一回死ねばいいのよ」

人の死を何とも思わない涼しい口ぶり。

ほら、そういうところが死神なのだと、口には出さず溜息に変えた。

もうこのやりとりを何度繰り返したか分からない。

既に自分が死んだというショッキングな出来事から、貴崎は開き直り始めていた。

死神であるこの女は、名前をユウコという。

貴崎が「おばさん」と呼んで女を怒らせた結果に得た情報だ。

ユウコの年齢は恐らく三十過ぎ。一般論でいうと美人なのだろうが、度が過ぎる程のヒステリックな女で、貴崎が話す一言一言に過剰に反応するから、出会って三時間、ずっと怒っている。

本来無口な貴崎はこういうタイプがたいそう苦手だ。いや、こういふ女が得意ですと堂々胸張っていえる奴に会ってみたい。貴崎の予想では、かなりの確立でユウコは独身、彼氏もない。

「ねえ。あれじゃない？」

低速運転をしていたユウコが、突然「ほら、あのバス停の向こう……」と指をさす。

この車に乗ってから三時間ちかく。

高く昇ることのなかった冬の太陽がさらに低空にすべり落ち、輪郭を橙色に染めはじめていた。

ユウコが指差す国道沿いの脇道を見ると、なるほど 『割烹

阿津野』と上品な楷書で書かれた見覚えのある看板が目に入った。

貴崎が死んだあの日。数少ない記憶の中で、唯一鮮明に覚えているのがこの料亭の名だった。

自分を殺すことになる男に連れられて行った割烹料理の店。足を踏み入れたことのない敷居の高い空間と、格別な味の料理に、貴崎は数時間後の自分の運命も知らずに浮かれていたのだ。

砂利の敷かれた広い駐車場で車を止め、平屋造りの建物を二人し

て車内からうかがい見る。

「たぶん。ここで間違いない、と思う……」

神妙な面持ちで貴崎が言うと、ユウコは「よし……」「とうなずいてからカーナビのタッチパネルに触れた。

現在地を示している画面を拡大する。

この辺り一帯の地図を表示させると、それを暗記するように見つめてから、また窓の外をぐるりと眺めた。

「って事は、ここからそう遠くない山奥に、あんたの死体が転がってるって訳ね」

貴崎は表情を曇らせてからゆっくりとうなずき、改めて車外の風景を眺めた。

オレンジ色に染まりゆく小さな町を、黒々とした山並みを取り囲んでいる。

途切れることなく続くあの並々とした山林の中から、あの日最後に貴崎が見た、広域の夜景が臨める場所　貴崎が死んだ場所を探し出さなければならぬ。

そして更に、その場所からそれほど離れていない森の中に捨てられているであろう自分の死体を探すのだ。

考えるだけでも気が滅入る。

それでも探さなければならぬ。

ユウコはこの数時間、なんにも貴崎をあの世に送り届けるために車を走らせていたわけでは無い。

死んだ貴崎を迎えに来た理由、車に乗せた理由　それは行方不明である貴崎の死体を探すためだ。

貴崎は昨日、名前も知らない男に絞殺された。

この出来事をうけて、貴崎本人以上に慌てたのが、貴崎の死をまったく把握できていなかったあの世　ユウコが言う生死を管理する役所　であるという。

貴崎が死んだ場所を始め、殺害時間から殺害者の身元まで、詳しい情報がまったく分からない。

分かっているのはユウコが持っているぐしゃぐしゃの書類に記された、貴崎が死ぬまでの簡単な経過だけだった。

人間誰しも生まれた時点で役所に情報を提出して戸籍をつくるように、死んだ時も同様、あの世で戸籍のようなものを作るらしい。その時に最低限必要な情報が、貴崎の場合多に欠けている。その上、最も大切な死体までもが未発見のままなのだ。

ユウコが言うには、魂と身体は二つでワンセット。例えば搭乗券とパスポートのようなもので、貴崎の今の状況は、空港の国際線で飛行機に乗ろうとしたら、搭乗券しか持っていなかったという状態によく似ている。

搭乗券とセットで持っていたはずのパスポート　つまり遺体を探そうにも、よくよく確認してみれば戸籍　死んだ時の情報自体が無いじゃないかという珍事なのだ。

よって貴崎は今、魂一つであの世でもこの世でもない搭乗口に立ちつくし、出国も入国もできない不安定な状態におかれている。

年に数回あるかないかの、この珍事件の理由は悲しいくらいに単純だった。

あの世がもつとも忙しくなる大晦日を一週間後に控えて、人手を他部署に取られた監視部門の不祥事。要するにあの世側の職務怠慢なのだ。

「大丈夫。七日間もあんだから、なんとかなるわよ。元氣出せ！」

少年」

ユウコに荒っぽく肩を叩かれて、貴崎はまた深く息を吐く。
期限は七日間。

死んでから初七日の朝日を臨むまでの七日間のうちに、とにかくこの世界のどこかで息絶え腐敗しはじめている貴崎の身体を見つけないければならない。

「元気出せってさあ……あんたらが仕事を怠ったせいで俺がやばいことになってんだろ」

一言くらい謝ってくれても罰は当たらない。

「あんたがこの忙しい時期に死ぬから悪い」

「俺だって、死にたくて死んだわけじゃ……」

「知らない人にはついて行かないって幼稚園で教えられたでしょ？
殺人者について行った、あんたが悪い」

そう言われてしまうと、反論のしようがない。

「あのさあ。もし、期限内に、俺の身体見つからなかったら、どうなの……？」

「ねえ。悪いけど、そこ開けて煙草取ってくんない」

「聞いてんの？ どうなんだよ。七日間で俺の身体が見つからなかったらさあ」

ダッシュボードの中から煙草を取り出しユウコに渡す。

「ねえ、どうなるんだよ。もし俺の身体発見出来なかったら」

「まあ、なるようになんてしょ」

紫煙をくゆらせ、ユウコが気だるそうに言う。

「なんだよ、それ。答えになってねえじゃん……」

一旦停止の標識でブレーキがかかると、ユウコの右斜め頭上で幾重にも絡まりあった交通安全のお守りの鈴がじゃらりと鳴る。

この車は、貴崎の殺害現場　あの男の車ではない。

確かに同じ車種ではあるのだろうが、まず助手席のシートカバーが違う。足元にしかれたマットの色が違う。こんな最新型のカーナビも搭載されてはいなかったし、なによりフロントガラス右上に吊り下げられた、近代的な車内スペースに対してあまりにも不釣り合いな大量の御守り。

認めたくはないが、自分を殺したあの男の方が、今隣で運転している女よりもずっとセンスが良かったと思う。

「いいじゃないのよお。死ぬ前に、あんな高級料亭で美味しいご飯食べれたんでしょ？」

私なんて昨日の夕飯、天津甘栗とビール二本よ」

「それって夕飯食ってないのと一緒にだろ。もつとちゃんしたもん食えよ！ そんなんだから俺の身体見失っちゃうんだろ」

「あ、一キロ先でドライブスルーして行くわね。久しぶりにファイルオフィツシユセットが食べたいの」

ユウコがわくわくした口ぶりでカーナビの目的地を変更する。

「俺の話聞いてんの？ ちゃんとした飯食えて。せめて牛丼とかにしるよ」

「やあよ。車降りるの面倒だもおん。あんたが買って来てくれるなら別にいいけど、って無理か。あんた死んじやってんだから、人から見えないもんねえ」

「ごめんごめんとユウコが笑う。

また憂鬱な気分になってきた。

「なあ頼むからしつかりしてくれよお……。そんなんで本当に俺の身体見つかんのかよ」

流れていく風景をもう一度眺める。

夕日に染まる山並みが、美しくは感じられない。

むしろ怖いとさえ思う。七日間という少ない期限のうちの第一日目、終わろうとしている。

「そんな暗い顔すんじゃないわよ。
あんたが見たっていう、その夜景スポットさえおさえりゃ、近くに捨ててあるに決まってるんだからあ、死体なんて。そう遠くに運んだりしないわよ」

その夜景スポットがすぐに見つかるとか怪しいものだ。

なにしろ死んだ日の記憶は、車からの景色や走行時間、あの夜景でさえ特徴的なものは何一つ覚えてはいない。そしてもっと悪いことに、夕食をとった場所は山に囲まれていて、近くの夜景スポットなんて数え切れないほどに存在するだろう。

だいたい夕食後、どれくらいの時間をかけて、あの夜景が見える場所まで行ったのかを覚えてはいないのだ。

もしも、あの場所がここからずっと離れた夜景スポットだったら……その可能性を思うと、流れていないはずの血が顔から引いていくのを感じる。

まさに前途多難だ。

「あんた死神なんだからさあ、責任もって、絶対なんとかしてくれよな……」

力なくつぶやくと、ユウコがわざとらしく溜息をつく。

「だからあ！ その呼び方やめてくれる？」

結局この会話の繰り返しなのだ。

「ほんと、何回言わせりゃ気が済むわけ。そんな事だから
女に浮気されんのよ、と女はまたぼやく。」

七日間のはじまり（後書き）

訳分からん設定でスミマセン。自己満足もいいところで、もはやB
Lでも何でもねえなこれ……と自分でも思ったりする訳ですが、ま
ありハビリ作品ですのでご容赦頂きたいですm（| |” m（ 次
回からはBL要素が少しずつ露出してくるような……そんな気がし
ます（ - 公 - ; ）

ここでお知らせです。

前書きにも書いたように、この『二度瞬く』は今後性描写が入る
予定です。そのためガイドラインにしたがって、R18として
新しく投稿し直すことになります（ボタン一つで設定変更出来れば
いいのに……（ ; ; ; ;（ウウ）。よって近いうちにR15とし
ての『二度瞬く』の作品は消去されますのでご注意下さい。

古い作品も少しずつR18に移行していく予定ですが、今まで皆
様から頂いた感想や評価は全部消えてしまっただでしょうか……それ
はすごく悲しい（ ; ; ; ;（どうにかならんもんでしょっかね。

作業の進み具合については活動報告に詳しくアップしますのでよ
ろしくお願いします>（| |” <

夢にとける

「ねえ、その木の根元は　？　違う違う！　後ろの　そう。少し盛り上がってるでしょう？　いかにも埋まってそうじゃなあい？　死体が」

言われて、泥にまみれた靴先でこんもりと膨らむぬかるんだ落ち葉を取り払うと、硬い地面が現れる。どうも数日以内に掘り返された跡はないと、遠くのユウコに首を振る。

夜景スポットと呼ばれそうな場所をユウコの車　FDといったか　で適当に回り、時折車外に出ては深い森の中を歩いて探しまわる。

探すと言っても、足を使って搜索していたのはもっぱら貴崎で、ユウコは低いボンネットに腰を下ろして副流煙を吐き出しながら、その奥が怪しいなどと指図するだけだった。

「おかしいわねえ。その辺の木の枝にでも、引っ掛かってないかしらあ」

白い手首を返し、エルメスとやらの細い腕時計に視線を落としたらユウコが言う。

人の死体を落とした鍵のように軽く言うが、隠す方の男だって自分の身の安全がかかっているのだ、死ぬ気で隠すだろう。そう簡単には見つかりそうも無い。

ずいぶんと暗くなってしまった空を一度見上げ、絶望的な気分でまた地面に視線をはわす。

ズボンの裾には白く乾いた泥土がこびりつき、通学用のユニーカ―は泥と落ち葉にまみれて元は何色の靴であったかが定かではない。

その汚らしい足元が視界に入るだけで貴崎の口元は自然に歪んだ。この臭い枯葉の下に自分の全身が埋まっているかもしれないと考えるだけで吐き気がする。

貴崎は身体や衣服が汚れることがひどく嫌いだ。潔癖症に近いと自分でも思っている。

そして身体が汚れること以上に、泥まみれになってまで必死に何かにすがり付き、執着して這いずりまわる己の姿がこの上なく格好悪くて大嫌いだ。が、その対象が自分の死体となれば、膝から下を汚すことくらいは致し方ない。

殺されて魂だけになってしまった貴崎には、七日以内に自分の死体を見つけて成仏する。正しくは成仏とは言わないのだとユウコは怒鳴るが、それしか残された道はない。

理解出来る出来ないの問題ではなく、もうそれしかないのだとユウコは何度も言った。

もう一度後ろを振り返ると、根拠一つ無く「なんとかなる」と自信たっぷりに言い切った死神は、貴崎のことなど素知らぬ様子で、高いヒールの靴をタイヤにかけて空気圧を確かめるように踏み込む動作を繰り返している。

こんなことで本当に自分の体は見つかるのだろうか。深呼吸のように深い、身体の隅々にまでいきわたる大きな溜息を吐いた。

結局その日、貴崎の死体は見つからなかった。

そもそも死んだ場所すらよく分からないのだから無理な話なのだ。車の通りが少ない山中であったのは確かなのだが、殺されたとうの本人が、初めて口にした酒にほどよく酔っていたせいで、それ以

外の情報が極端に少ない。

夜十一時過ぎ。

死体探しを諦めて、夜景が見えそうな場所を数箇所回ってから高速に乗り、貴崎は沈んだ気分です。車外の流れる景色を眺めていた。

「あ、そっぴやあんだ。最後に会って話しておきたい人とか、いる？」

不意な質問に顔を上げる。

「会って話しておきたい、人？」

「そう。ほら、お世話になった人とかにね。最後に一言感謝の気持ちを伝えたいとか、初恋の人に一目会いたいとか……生きてりやいるいるあんでしようよ。こちらは一応サービス業だし？ あんたの場合は時間も沢山あるわけだからあ、まあ未練無くすつきり死にたいつてんなら出来る事は協力させて頂くわ」

「生きてる奴と、話せんのかよ」

死んで魂だけの貴崎は、今のところ生きて人間には見えない。早い話が幽霊なのである。

「まあね。死んだ人間が夢に立つってあるでしょう。あれよ、あれ」

「俺が、夢に出るってこと？」

「そう。話したい人の夢に入んのよあ、あんたがね。で、ひゅうどろどろっと人様の夢に登場して、生前は大変お世話になりました、あざしたって頭下げてくんのよ」

「人の夢に、入れんのか……」

それは何だか楽しそうだ。

「……マジで？」

少し明るく声を発して隣を振り向くと、ユウコは形の良い口角を

きゅっと上げる。

「まあ夢でのことだから、起きたら死者と話したことなんて忘れちゃってる場合も多いけど。でも夢の中でなら、目見てちゃんと会話できるから」

貴崎は少し考えてから「じゃあ」と漏らす。

「じゃあ、やっぱり親父と兄貴には会って話したい、かな……。世話になったし、ちゃんと礼くらいは」

本当は一言礼をいうくらいでは済まされないほどの迷惑を家族にはかけてきた。

我俣だっと思った。

貴崎の死を知った時 いつになるのかも分からない、ずっと先のこともかもしれないが その時の家族の心情を思うたびに、激しい後悔と悲しみにどつぷりと沈みこむ。その嘆きに底が無いことを知って今では意識して考えないようにしている。

せめて、ありがとうと言いたい。

夢の中でも何でもいい。

一番の心の支えが取れるかもしれないと気持ちが浮きかけたところで、「ああ、ごめんなさい。言い忘れてた」とユウコが遮った。

「あんたの実家 貴崎神社だっけ？ だめなのよお。神社・仏閣・教会、その類にはあんたみたいな生きても死んでもいない不安定な状態は入れないの。」

境内の中にある住居で家族が寝起きしてんでしょ？ 鳥居なんてくぐったら、魂がこげてズルむけになっちゃうんだからあ。

日中に顔を見るだけなら境内から出た時に会いに行けばいいけど、夜中寝ている時に夢に立つってのは難しいわねえ。旅行でもして境内の外で夜寝る機会があるなら、チャンスは無くもないけどさ」

「なんだよそれ。じゃあ、駄目じゃん」
ぬか喜びだった。

また顔を背けて窓の外を眺める。

確かに貴崎の実家は神社だ。

貴崎神社という名の小さな神社だが、小さい割にはちゃんとした由緒正しい歴史があるのだと神主である父は酒に酔う度自慢げに言う。

年中無休なくせに一年を通して貧乏だし、正月はクラスメイトが参拜に来るから恥ずかしいし、これまで実家が神社だからといって良い思いをしたためしが無い。

死んでまで家業が問題になるうとは。

残念だったわね　とユウコは軽く言い、加速と同時に指示器を出して前の車を追い抜いた。

「他に誰かいないの？　友達とか彼女とか　ああ、彼女には浮気されたんだっけ？　そんな性格じゃあ、親友もいないのかしら」

挑発的に微笑む死神にムツとしながらも、親友という言葉で一人思い出した奴がいる。

「あのさあ、親友ってか……幼馴染なんだけど。俺、そいつに謝り忘れたことが一つあってさ　」

それから四時間。

奇妙な成り行きで、今貴崎は成宮の眠るベッドの脇から、幼馴染の穏やかな寝顔を見下ろしている。

この部屋に入るのは何年ぶりだろう。

最後にここに来たのは小学生の時だった気がする。あのころは毎日のように成宮の部屋に遊びに来ていた。

成宮冬馬なるみやとうまはハーフだ。母親がブルガリア人だったかで、半分異国の血が流れている。

そのせいか小さい頃から一緒にいると兄弟に間違われるほど、見た目も性格も貴崎よりずっと大人びていた。

幼稚園が一緒だったことから親同士が仲良くなり、その頃からの付き合いである。

貴崎を困らせてばかりいる血の繋がった兄に代わって、成宮はよく貴崎の面倒を見た。貴崎も本当の兄のように、優しい成宮を独占して頼りきっていた。

その関係が途切れたのは中学に入った時だったか。

突然成宮が母親の母国で暮らす事になったのだ。

中学三年間を海外で過ごし、ちょうど高校入学の年に帰国した成宮は、もう貴崎の知っている幼馴染ではなかった。

偶然同じ高校へ通う事にはなったものの、バスケの国際大会に出場したことがある学生が入学するという噂で帰国する前から有名だったし、入学前からファンクラブらしきものが立ち上がったと聞く。実際に帰国してみると噂に劣らぬ程、成宮冬馬は容姿実力共に優れていた。

男のくせに才色兼備という言葉が良く似合い、既にその頃クラスメイトと距離をおいていた貴崎には当然近寄りがたい雰囲気があった。

何よりも、明るくて気が利いて誰にでも好かれる成宮のような人間こそ、貴崎がもつとも遠ざけたい性格の人間だった。

なのに成宮は貴崎の気持ちを見捨て、以前のように馴れ馴れしく接してくる。頼みもしないのに兄弟のように貴崎に世話をやいて

心配する。それこそ、貴崎が学校から姿を消したくらいで息を荒げて町中を探し回る程に。

そつという性格が嫌なのだ。

そつやって、良い人だよねと誰にでも好かれて、チャホヤされていつも優しく微笑んでいる。

そんな成宮冬馬が　　貴崎は苦手なのだ。

一緒に通学しようと言われた時、周りの目を気にせず断っておくのだたと今でも思う。今この現状を向かえて、なおさらその思いは強い。

薄暗い部屋の中で、豆電球が照らし出す整った顔を腰をそつと覗き込む。

改めて見てみるとやはり異国の血が混じっているのだと感じた。

パーマがかかった細い髪の毛や高い鼻。

悔しいが格好良いとしか言いようがない顔立ち。

長いまつ毛で閉じられている瞼の下では、褐色の瞳が夢を見ているのだろう。

その夢の中に今からお邪魔しようというのだから、なかなか緊張する。

貴崎は枕元にうずくまり、自分の前髪を手でかき上げて額を出した。

ユウコに教えられたとおり、深呼吸を二回して、三回目息を全て吐ききり、目を閉じて三秒間。寝息を立てる成宮の額に顔を寄せ

る。
ち、近い。
動いていないはずの心臓が高鳴る。

ギョツと目を閉じ、熱を測るような体制で互いの額を合わせると、

一瞬熱いと感じた接触点がじゅつと音をたてて煮え立ち溶けていく。
鉄板にアイスクリームを落としたような感触。

不快な感覚にひるみそうになるが、後ろに引くことも出来ずに息
を飲んでぐつと頭に入れた。

触れては溶ける面積をどんどん増し、死人は夢にとけていく。

夢にとける（後書き）

【後書】皆様おひさしぶりでございます

相変わらず早朝から作業しております（＾＾；） 本当はもっと早く更新出来る予定だったのですが、結局こんなに遅くなってしまいました。

四月に入った頃は、もう眠たくて今日は起きれん！という日があったりもしたのですが、皆様からのコメを読み返したりして何とか頑張れました+。：。：（*´）ノ。：。+。

今は子供がいても宇宙に行けちゃう時代ですので（素晴らしい！）、家事があるから子供がいるから、時間がなくてやりたい事が出来ないってのは言い訳（あくまで私の場合ですが……）にしかならんあゝと気付いてしまいましたw（；）w
そろそろ旦那が起きてくるので、洗濯物たたんでお茶でも沸かしますか……（；）

【コメレス】

炎 様（未公開なので頭文字表記です）

こちらのサイトで「二度瞬く」にコメ下さった方、第一号でございます

訳の分からない展開で申し訳ないのですが、少しでも分かりやすく書けるよう頑張りますので最後までついて来て頂けると嬉しいです

多大なる執筆の原動力を頂きました 本当にありがとうございます
す（；）

ユメノナカ（前書き）

この小説は第七話からBL要素の性描写が入りましたので、ガイドラインに従いまして途中からムーンライトノベルの方に再投稿しなおしています。続きが読みたいと思っただけの方はムーンライトの方へお願いします。再投稿後しばらくで、こちらの方は削除させて頂く予定です。ご了承下さい。

（ムーンライトでの小説目次です <http://novel18.syosetu.com/n82161/>）

ユメノナカ

「交通安全の御守りと　あと、おみくじ一回」

「千三百円になります」

疲れを隠さぬダレた声で言い、貴崎は男が差し出した千円札二枚を受け取ってから、釣り銭と一緒に手元にある六角柱の形をした木箱を男に差し出す。

木箱にはおみくじと楷書で書かれている。

意気込んだ表情で男が木箱を二三度振ると、じゃらりという音と共に、棒を一本木箱が吐き出した。

「二十三番」

男が口にした数字を聞くやいなや、隣で回転椅子に座り足元にストーブを配備してぬくぬくとしていた兄がくるりと背を向け、壁一面に並んだ小さな木造の引き出しを睨みつける。

その間に長方形の交通安全守りを紙の袋に入れ、封をしたところで、ちょうど横からにゅつと兄の手が伸びてきて「二十三番　大吉」と書かれた短冊を渡された。

「ようお参り下さいました」

軽く頭を下げながら男に手渡すと、男は大吉という文字を見つけて嬉しそうな顔で礼も言わずに去って行った。

既に次の客が一万円札を握り締めてこちらに身を乗り出している。「その千五百円の破魔矢を二本と、あと子供用の御守りってあるかしら？　孫に買ってやりたいのよ」

一息つく間もあけずに参拝客は次から次へと絶え間なく押し寄せ

る。

視界に映るだけでも十数人はいるであろう人々が、これがいい、いやあちらがいいだろうと社務所の軒先に並んだ小さな御守りや護符を指差し品定めしている。

その賑わいが途切れることは、少なくともあと数時間はない。

それもそのはず、今ここは年が明けた一月一日。

小さな町の貧乏神社が年に一度限り、晴れ晴れしく賑わう正月元

旦 らしい。

更に詳しく言えば、どうやら今ここは元旦 　の夢を見ている、幼馴染の夢の中なのだ。

あと一週間で大晦日を迎えようという年の瀬の夜、貴崎は名前も知らない男に呆気なく殺されてしまった。

死んだ日に幼馴染に吐いた暴言を詫びようと、幼馴染の 成宮冬馬の夢に数時間前に潜入したのはいいが、そこは何故か至極見覚えのある場所だった。

砂利を踏みしめる無数の靴音。

たくさんの笑い声。

視界を横切り大蛇のようにうねる人の列には、時たま艶やかな振袖が混じり「あけましておめでとうございます」と背を折っている。夢の中とは思えぬほど、鮮やかで現実感に溢れている。

懐かしい風景 成宮の夢の中 そこは貴崎の実家、貴崎神社の境内であった。

夢の内容に理由などないのだろうが、何が楽しくてこの年の瀬にわざわざ正月の日の、それも貴崎の実家の古汚い神社なんぞを夢見るのか。

おかげで貴崎は死んでまで、一年で一番嫌な家業の手伝いをさせられている。

社務所の奥　客からは見えない棚の後ろで、涼しげな表情の父親が煙草をふかしている。

死んで一日会わないだけだが懐かしく感じる。

生前は大変世話になりましたと一言礼を言っただけだが、成宮の夢の中で言っても無意味だろう。

元旦なのだから当然貴崎は社務所の軒先で、毎年恒例、袴姿で御守り売りの店番をさせられている。

売っているのは御守りだけではない、破魔矢に護符、絵馬やおみくじ、小さい神社にしては品揃えが良く、父親の趣味なのか、ここ数年は干支の置物や掛け軸のようなものまで売っている。

身体は社務所の中にあるとはいえ、上半身は冷たい外気にさらされているから頬の表面はひりひりと痛いし、手先はしびれている。

立ちっぱなしだから足も痛い。

その待遇の悪い貴崎のとなりで、ストーブ前の回転椅子を陣取り、短冊を引き出しからだして渡す係りを担当しているのが、こちらも毎年恒例、二日酔いで酒臭い、五つ歳の離れた兄貴だ。二十歳を一つばかり過ぎただけなのに毎年恒例で正月には酒臭いというのは、我が家はどつという教育方針なのか。

ちよつと油断すると唯一の仕事を放ったらかしにして居眠りを始めるから迷惑極まりない。

「ようお参り下さいました」

数え切れない程言った台詞をまた繰り返して、それほど広くない境内の奥に目を向ける。

拝殿から列なつた群衆の間、目を凝らさなければ分からないほどの隙間からじつと貴崎を見つめている褐色の瞳。

こちらを怖いほどの無表情で眺めているのは、今この夢を見ている張本人 成宮冬馬だ。

パーカー姿でポケットに手を突っ込み、手水舎の柱にもたれ掛かつては時折携帯をいじっている。

何故幼馴染の夢の中で自分が家業の手伝いをしているのかも分からないし、その夢をみている本人が何故あんな場所から自分を眺めているのかも貴崎にはさっぱり分からない。

とにかく貴崎は成宮の夢の中で袴姿で御守りを売り、成宮は遠くからその様子を隠れて見ているのだ。

いつそのこと自分の方から成宮に話しかけてやろうかとも思うのだが、人の夢の中で身勝手な行動は慎むようにとユウコからきつく言われている。何でも夢を見ている人間にひどく負担がかかるのだとか。

「え、マジ？ほんとに貴崎君いんじゃない！」

振り向くと、名前しか知らない隣のクラスの女子が連れ立って並んでいた。

「ね？ だから言ったっしょ」

「うそお、貴崎君って神主さんなわけ？」

「ねえねえ。一番効く恋愛成就の御守り下さあい」
「まただ。」

成宮の夢は実によく出来ている。

人の夢とはこんなにも現実にも忠実なのかと感心させられるほどだ。護符や御守りの一つ一つ、兄のたるそうな仕草、参拝客の振袖の華やかな柄まで現実世界そのもので、もちろん正月に実家の神社にクラスメイトやその友達が参拝に来るといふ、嫌な恒例行事まで手抜きなく再現されている。

「五百円になります」

突き放す様によそよそしく言いながら、適当な恋愛成就の御守りを紙の袋につめて渡す。

こんな御守り効くはずがない。

元来そうは思っていたのだが、今なら声を大にして、自信をもって言える。

そもそも神様のご利益なんてものが本当にあるのなら、神主の息子である自分が殺されるような事はまず無いであろうし、死んで尚あの世の不幸で成仏できないなんて事もないだろう。神が存在するのなら、直接謝罪に来て頂きたいほどの不祥事なのだ。

「ねえ、写真撮ろ！ 写真！ 知美、貴崎君の隣に並びなよお」

「あ、私も！」

女子達がきゃきゃと騒ぎ始め、断りも無くシャッター音が響き始める。

もう一度参道の方に目をやると、成宮は手水舎の柱から背中を離して、実に落ち着きのない様子でこちらを伺っていた。やや首を傾け、その表情は先ほどのまでの無表情とは違い、ずいぶんと苛立っているように見える。

その後も貴崎は延々と続く参拝客に御守りを売り続け、成宮はその様子を遠くからずっと伺い、貴崎が客に長く話しかけられる度にその表情は曇り、何故か苛立った様子を見せていた。

「おみくじ一回」

結局成宮が社務所にやって来たのは、参拝客が途切れ途切れになる日没前だった。

一度境内から姿を消したと思ったら、近くのコンビニに寄ってきたらしくビニール袋を手にぶら下げて、のこのこと貴崎の前に現れた。

やっとか。

夢の中とはいえ、大嫌いな家業の手伝いを年に二度もさせられるのはご免だ。

「お前さあ 何してたんだよ」

貴崎が言つと、成宮は首を傾げる。

「何って……今来たところだけど？」

嘘付け。

二時間も人の事をストーカーよろしく睨みつけておきながら、よくもそんな嘘が言えたものだ。

「あ、コンビニ寄って来たんだ。差し入れ買って来たんだけど、今時間ある？」

貴崎が睨みつけるのも気にせず、さも今来ましたと言わんばかりに惚けて、コンビニの袋を胸の高さに持ち上げ成宮は言った。

壁の掛け時計を見ると夕方の四時二十五分。

同時に時計を見上げた兄が、嫌そうに「五時までな」と売り手交代を引き受けて立ち上がった。

「よかった」

そう笑って、幼馴染は小銭を差し出した。

寒さにしびれる手で受け取ると、百円玉が二枚転がる。

「おみくじは一回百円。そこに書いてあんだろ」

百円玉を一枚返そうと手を伸ばすと、入れ違いに伸びてきた成宮の手がおみくじの木箱を取り去って行った。

「あ、それ二人分。貴崎も引きなよ」

言いながら、じゃらりと大きく木箱を振る。

「いや、いいよ」

「あ。四十四番だって」

貴崎を眺めては苛立つ表情を見せていた顔が嘘のように、成宮は楽しそうだった。

差し伸べた手の行方が定まらず、面倒臭くなって返そうと握り締めていた百円玉をつり銭用の小銭箱へ入れ、貴崎もおみくじの木箱を振った。

七番。

番号を隣に伝えると、兄は面白そうに鼻で笑ってから四十四番と七番の紙を差し出した。

少しムツとしながら二枚受け取り、成宮に一枚を渡す。

成宮の四十四番は小吉。

貴崎の七番は 紙を見なくても分かる。言わずと知れた大凶だ。おみくじ五十本の内、唯一の大凶。それを一番縁起が良さそうに聞こえるラッキーセブンに入れてきたところに、作り手の性格の悪さが出ている。

「いつもの所で食べる？」

「ああ」

社務所を出てから成宮と二人して境内の奥に歩いて行った。

乾燥した刺すような冷気が袴の裾から立ち上ってくる。

拝殿と本殿を抜け、その奥にある貴崎の自宅を横切ると、境内の

喧騒は消えて、神聖とも思えるほどに静寂を保っている鎮守の森に入る。年を終えようと新年を迎えようと、ここの木々変わらず沈黙を守り続け、何かを黙祷している。そこに踏み入るだけで、つい先ほどまでいた場所が俗世であったと気付かされる。

本殿や拝殿よりも、ここはずっと聖域染みているのだ。その聖域を侵すかのように、枯れ草の上を歩く二人分の足音だけが響く。

しばらく行くと、森と山の境界のような場所から一人一人通るのがやっとという細い坂道が上に伸びている。その急な山道を五分ほど登ると、頂上で視界が広く開けた。

ふうと一息吐き出す。

歩みを止め、乱れた呼吸を落ち着かせて、いつもの所　いつもの場所を眺めた。

貴崎神社の裏山に位置するこの小高い場所には、小さな社ヤシロがある。小さくとも、本殿とは違った神を祭るための末社と呼ばれるれっきとした神社で、古びてはいるがちゃんとした灯籠や狛犬まで備わっている。

「久しぶりだね、ここ」

角が取れて表情の分からない小ぶりな狛犬を撫でてから、成宮が社の向こう側まで歩いて行った。

社の向こうにはぞつとするほどの急勾配の石階段がある。

一段一段降りるよりも転がり落ちた方が速いだろうと思われるその階段を降ると、いつも成宮と登校時に待ち合わせている鳥居に出る。

つまり貴崎は毎日、本殿貴崎神社に隣接する自宅から、今上がってきた山道を登り、数百段ある石階段を降って、自宅からは一山越えた真裏に位置する場所　鳥居まで出て、成宮と待ち合わせて登校しているわけである。理由は簡単、それが一番高校に近いからだ。

階段の一番上に腰掛けて景色を眺める。

貴崎は、ここからの景色が好きだ。

高台だけあって、町が一望出来る。

それだけではなく、天気が良ければずっと遠くに海が見える。

今のような夕方には、高度の低い斜陽がきらりと反射するから分かる程度で、大きさにすると指の爪程度しか見えないが、ごちゃごちゃした町並みと空とを隔てる上澄みのようで、小さいけれども存在自体が美しいと思える。それに誰も来ないこんな寂れた場所から、あんなにも遠方の海が見えるのだから一見の価値がある。

あれが海では無く、東京タワーや遊園地の赤い観覧車ではいけないのだと貴崎は思う。

ここへ来ると心が休まる。

下界で上手く立ち回れない、ぎくしゃくした凝り固まりや汚れが浄化されていく気がする。

はるか遠くの海の、そのまた向こうからやってくる風が全てを無にかえしてくれる気がする。

誰も知らない自分だけの場所。

それを唯一共有するのが幼馴染である成宮だ。

小さい時から貴崎と成宮は数え切れないほど、よくここで遊んだ。同じ高校に通い始め、テスト期間中や部活が無い日に成宮が一緒に帰ろうと言い出すと、たいていコンビニに寄り、買った物をここで食べる。だからここは貴崎にとって、通学路であり、帰り道であり、唯一の癒されスポットであり、幼馴染と会話無く買い食いする場所でもあるのだ。

「はい、祐の好きなアイス」

成宮が袋から出してよこしたのは、貴崎がいつもコンビニで買うミルクバーだった。

大好物といえども、この正月の極寒にアイスの差し入れとは。やはりどこか考え方が日本人離れしている。

そこでようやく思い出した。

そうか そうだな。

実際今年の正月、貴崎はここで同じことを思った。

家の手伝いで店番をしている時に成宮が差し入れを持って現れ、二人でおみくじを引いて、ここでアイスを食べた覚えがある。

そうか。

成宮はあの時のことを忠実に思い出している。

あの時の夢を見ている。

ここは、今年の正月、一年ほど前の冬の日の思い出の中なのだ。

漠然と、よく出来た正月の夢だとばかり關心していたが、これは実際にあった状況なのだ。

人の夢というものが、どれくらいの再現性かは定かではないが、実際に起こった事を思い出しているのなら、こんなに鮮明なものも頷ける。

ということとは、成宮が境内で何時間も貴崎のことを隠れて見ているというのも事実なのだろうか。そのあたりは曖昧だ。

何しろ夢なのだから、事実がどう脚色されていてもおかしくない。

「おみくじ、どうだった？」

難しい顔でアイスの銀紙をはがしていた貴崎の隣に成宮が腰をおろした。

「あ、ああ」

アイスを一度口にくわえて袂を探り、大凶と書かれた紙切れを成宮に渡す。

「大、凶？」

「ああ。そうらしい」

「この御籤にあたる人は、信心薄く、故に身を滅ぼす者なり　だつて」

当たっている。

いや当たっていた、というべきか。

実際のところ、おみくじの予言通り、貴崎の身は昨日あっけなく滅んでしまった。

「待ち人、来ず。恋愛、成就せず。探し物、身近な場所にあるも見つからず。賭け事、惨敗もしくは　さすがに大凶だね。良い事ほとんど書いてない。この結果を重く受け止め、信仰心を忘れず慎み深く生活をおくりなさいって書いてあるよ」

残念ながら手遅れも甚だしい。

だいたい今年の正月に大凶を引いたことすら忘れていたのだ。

成宮は苦笑してから自分のおみくじをパーカーのポケットから取り出し、貴崎の分と二枚重ねて四つ折りにし、立ち上がって、階段のすぐ脇から伸びた木の枝にくくり始めた。

それを見上げながら、貴崎はミルクバーを舐め取り不思議に思う。夢で思い出すほど、今年の元旦に記憶に残るような出来事などあっただろうか。貴崎の記憶では今までと変わらない退屈な正月だった。

夢の中だというのに、アイスは甘くて、景色は良い。

最後にこのアイスを口に出来たのは喜ぶべきことである。
死んで鳥居の中に踏み込めない自分が、この景色をもう一度拝めるとは思ってもみなかったので、例え夢の中とはいえども、それは嬉しかった。

オレンジ一色に染まる景色に目を細める。
夕日に照らされた町の細々した建物がおもちゃのジオラマそのものだ。

こんなにも天気の良い夕暮れには海が見えそうなものだが、何故かそれらしいものは見当たらない。

夕焼けとのつなぎ目ぎりぎりまで灰色のビルやマンションやらが続いている。

何だろう。

何か　　違う。

何か違和感を感じる。

完全に現実世界そのものだと思われた成宮の夢の中は、こうして動きを止めて集中してみると、現実とは僅かに異なっているような気がする。

景色というよりも空気、雰囲気、風。

いつも感じる澄んだ冷たい風ではなく、少し生暖かくて柔らかな風である。

決して不快なものではなく、人肌くらいの温もりの心地よいそよ風で、なんとなく懐かしい香りがする。

この香りは　　おそらく成宮の香りだ。

香水のかおりでは無いし、かといって体臭でもない。

幼い頃から幾度と無く感じてきた、脳のずっと深い部分に記憶されていた香り。

石鹸の匂いのようにもあるが、柑橘系の爽やかさもある。

相当近くに寄らなければ感じない服の香り、肌の香り　懐かしい、成宮冬馬の香りだ。

この世界は息をしている。

空気が、空間が、世界全体が呼吸をしているのだ。

おそらく夢をみている成宮自身が寝息を立てることに、この空間全体がゆるりとひずみ、寝ている本人の香りがする弱い風を生じる。そのゆっくりとした一定のリズムで、貴崎の身体も周りの景色と共にふわりと緩やか浮く感覚がある。

ここはやはり、成宮の夢の中なのだ。

かすかに幼馴染の香りがする大気を肺いっぱい吸い込んでから、貴崎はようやく決心をかためた。

謝ろう。ちゃんと。最後くらいは。

本来の目的はそれなのだ。

死ぬ前、最後に会った時に、成宮に吐いた暴言を詫びなければならぬ。

成宮が夢から覚めたときに覚えているかどうかなんて最早どうでもいい。貴崎自身が思い残すことなくすっきり成仏出来ればそれでいいのだ。

「成宮。あ、あのさ……昨日の」

「祐。アイス、おいし？」

同時に言葉を発した隣の幼馴染の方に、意気込んで振り向く。顔を上げたそこで、はっとした。

違う。

違うのだ。

それも徹底的に違う。

成宮は貴崎のことを名前で呼んだりはいしない。苗字で貴崎と呼ぶ。

下の名前 祐ゆうと呼んでいた時期もあったが、それはずいぶん昔、小学生の頃だろう。

そして何より、視線が違う。

貴崎を見る幼馴染の目が違う。

こちらを覗き込むように何う、うつとりとした褐色の大きな瞳が、いつもより優しさに満ちていて、それでいて背筋がぞくりとするほどに何かを秘めている。

うつむき加減の長い潤ったまつ毛が、男同士なのに色っぽいと感じさせる。

目線に射抜かれて動けなくなる。

ずっと影からこちらを狙っていた肉食獣と目が合ったかのように息が止まった。

恐ろしい。

恐ろしいほどに 魅力的だ。

「おいしい？ ねえ、祐」

少し首を傾け微笑みながら成宮が聞く。

返事も出来ない。

何に対する恐怖心なのか、自然と上半身が成宮から離れようとする。すると成宮は少し身体をこちらに寄せる。

今までにない距離感で相手を感じる。

「俺も、お腹空いちゃった。……食べていい？」

幼馴染は尚もうつとりとした表情で、優しいゆっくりとした声で、上半身をかがめて貴崎の顔を覗き込む。

食べていいかとまた聞かれて、我に返った貴崎は、いつのまにか指の根元近くまで溶け流れていたアイスに目をやった。

「あ、これ」

やるよ、と消え入る声を発し顔を上げた時、鼻先数センチの距離に成宮の顔があることに気付き、またもや動けなくなった。かすかに漂うほどだった幼馴染の香りを一層強く感じる。

目の前にいるのは確かにいつもの幼馴染のはずなのに、それをそうではなくしている何かがある。貴崎の身体を硬直させ、無いはずの心音を激しく鳴らさせる何か、目の前に、今までない近距離でこちらに迫ってきている。

「アイスじゃなくて」

こっちだよ。

確かにそう聞こえたと思ったのだが。

あまりにも一瞬のことで、何がどうなったのか分からなかった。何しろ幼馴染が言葉を言い終える前に貴崎は両目をぎゅっと瞑った。

成宮が更に貴崎に顔を寄せたからだ。

数センチだった距離が消失して、触れる　と感じた途端、貴崎は怖くなった。

そうしたら。

やっぱりと言うか、予想通りと言うか　当然のごとく接触してくっついてしまった。

さらりとしていて心地よく、硬すぎず柔らかすぎず、表面の薄皮一枚隔てて熱い血液が脈打つのを感ずるほどに　それは、生命を

宿した人間の、生きた唇の感触だった。

ユメノナカ（後書き）

〃（。。。）フー やつと更新できました！

前の更新から、また一ヶ月以上たってしまったのですね！？

本当に遅くなってしまって申し訳ありません。そしてまたもや長文、その上変な設定でごめんなさいm（|_|）m（ペコリ

こんなに細々と連載している小説を忘れずにいて下さる皆様に大感謝でございます（TOT）

私事ですが、今年の目標は『転職』！！ってことで、新しい職に就くためにも5月から学校に通っております。通うといっても仕事の帰りに二時間だけ授業に出るとかで、社会人相手のパソコンスクールのような感じのところですよ。

だから週に二日から三日は、帰ってくるのが夜十時とかいう生活を送っています。

帰ってきたらもちろん息子はもう夢の中。夕飯食べさせて風呂入れて寝かしつけてくれているのは旦那ですから、本当にこんな妻を許してくれている彼には頭が下がります（T・T）

ろくに家事や育児も出来ていないような状態ですので、少しでも転職後に主人の負担が減って、息子と遊べる時間が増やせたらいいな。なんて思っています（完全なサラリーマンの発想ですが（^^；））

今は空いた時間に細々とやっているこのブログも、転職後にもっと自分の時間が増やして頑張りたい！！（ちなみに今日は息子が熱出して欠勤です。今スヤスヤとリビングでちいちゃいのが寝息を立てております）

こんな時代ですから、転職なんてそう簡単にはいかないのかもしれませんが、夢は大きく 貪欲に動いていきたいと思えます（

）うへへへえ）

自分から動かなければ欲しい物は手に入らないと教えてくれたのは、このブログ活動ですし 安定した定期更新が出来る生活を目指して頑張ります とか言ってる間に、二人目が出来ちゃったりしてね(´、´、´)＼(´、´、´) コラ！コラ！

【注意】この小説は第七話からB.L要素の性描写が入りましたので、ガイドラインに従いまして途中からムーンライトノベルの方に再投稿しなおしています。続きが読みたいと思っただけの方はムーンライトの方へお願いします。再投稿後しばらくで、こちらの方は削除させて頂く予定です。ご了承下さい。(ムーンライトでの小説目次です <http://novel18.syosetu.com/n82161/>)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5218j/>

二度、瞬く

2010年10月12日02時45分発行